

青森・岩手県境不法投棄現場の環境再生に向けて
～県民ワークショップの結果のまとめ～

開催概要

○開催場所・日時

- ①八戸会場（八戸市福祉公民館）
・平成20年9月7日（日）13時30分～16時30分（3時間）
- ②青森会場（青森県観光物産館アスパム）
・平成20年9月15日（月・祝日）13時30分～16時30分（3時間）

○参加者数

- ①八戸会場 14名
- ②青森会場 14名

○編成

1会場あたり、4～5人×3グループ+ファシリテーター（進行役）1名

○検討内容

「現場に何らかの付加価値を与えていく視点」
「ハード面、ソフト面の総合的な地域づくりという視点」から、
以下の方向性について検討しました。

1. 地域づくりに活かしていく自然
2. 地域づくりを次の3つの方向から検討
 - ①生活関連（新エネルギーなどインフラ整備など）の場として活用する
 - ②教育・文化・交流の場として活用する
 - ③経済活動（産業活動の場）として活用する

参照：県境不法投棄現場の環境再生に向けた3つのステップ（次ページ）

県境不法投棄現場の環境再生に向けた3つのステップ

－
(マイナス)

STEP 1：廃棄物の撤去（マイナスからゼロへの取り組み）

国の特別措置法に基づき、現場の不法投棄産業廃棄物に起因する生活環境の保全上の支障（公共の水域、地下水の汚染、廃棄物の飛散流出など）の除去を行う。

0
(ゼロ)

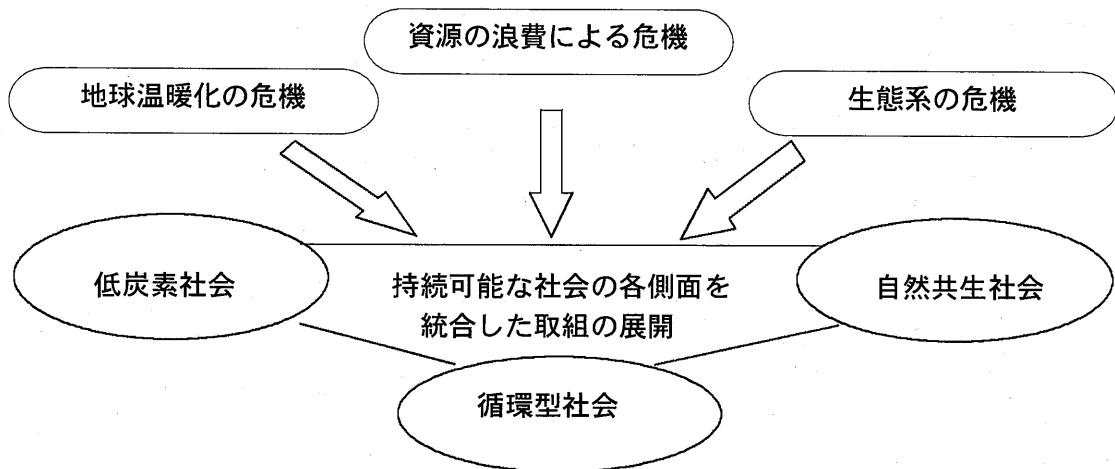
STEP 2：廃棄物の撤去完了（ゼロ） （参照：原地形イメージ図）

STEP 3：現場の環境再生（ゼロからプラスへの取り組み）

【環境再生を検討するにあたっての視点】

～前提として～

- 持続可能な社会形成の視点（地球規模での環境問題の現状と課題への認識）



- 県境不法投棄現場の修復には、多額な税金を投入していることから、本事案で積み重ねられてきた教訓、経験、知恵、技術を継承し、将来に、また全国にも活かしていく視点
- 県財政が極めて厳しい状況にあること



- 現場の環境を適正に管理することを視野に入れながら、何らかの付加価値を与えていく視点
- ハード面、ソフト面の総合的な地域づくりという視点



～ワークショップでの検討の主な方向性～

- STEP 2（ゼロ）の自然→住民ニーズに基づいた地域づくりに活かしていく自然
- 地域づくりを次の3つの方向から検討する
 - ・生活関連（新エネルギーなどインフラ整備など）の場として活用する
 - ・教育・文化・交流の場として活用する
 - ・経済活動（産業活動）の場として活用する

＋
(プラス)

1. 地域づくりに活かしていく自然の方向性について

◎どのような自然を創っていきますか？

- 緑豊かな自然
(森林(ブナ、ヒバ、スギ)、竹林、芝生、桑畑など)
- 樹木だけではなく、花や果樹など色とりどりの自然
- 日本一の芝桜
(「日本一」であることに意味がある。)
- 自然を人々が気軽に体験できる自然公園
- 傾斜地を活かした人工の川(水辺)がある自然公園
- 森林浴のできる森
- 木の実のなる森
- 昆虫採集(カブトムシ、クワガタムシ、セミなど)のできる森
- 湧き水がわいてくるような木々を植栽
- シンボル性のあるもの
(日立製作所TVCMで有名な「日立の樹」のようなもの)
- 何も足さない、何も引かない自然
(植林など人為的な手を加えないで、自然がどう蘇るか、自然の力を観察する。)

◎誰が、どのように創っていきますか？

～植林でつながりを・みどりでつながる仕掛け～

- 地元住民、馬淵川水系流域住民、県民、県外住民によるボランティア植樹
(1本1本に植樹者の名前をつける。自分の木が育つのを定期的に見守るイベントや研修会を開催する。)
- 自然教育の一環として県内外小中学生によるボランティア植樹
(長期的な観点で行うのも考え方)
- 環境保護運動に熱心に取り組んでいる県内・全国企業とのタイアップ・売却
(企業名を冠した「○○の森」の形成など)
- 個人、企業への分割売却やオーナー制
(実のなる木の栽培・収穫体験や収穫物の配送)
- 田子町小学校の卒業記念植樹
(長い年月をかけて「田子の森」として育てていく)
- 維持活動のための募金活動
(募金者への還元方法については要工夫)

◎どのように利用される場所ですか？

- 自然観察、自然教育、環境教育の場
- 域内外の人々の交流の場
(田子町と県内外の子供の交流、高齢者と子供・若年者の交流など)
- 1年を通じた現場体験プログラムを用意
(例：春－植える、夏－育てる、秋－収穫する、冬－スキー、1年中－星空観察)
- キャンプ、ハイキングなどができる場
- 自然ふれあいキャンプ場
(現場の野菜を食し、動植物と触れ合い、宿泊するなどすべてをまかなうことが体験できるキャンプ場)
- 自然あふれるスポーツ公園
- 傾斜地を活かしたスキー場
- 林業の体験林
- 田子町民に対して、農業用地として一坪地主のような形で貸し付け
- 星空観察やUFOウオッチ
(現場は星空がとてもきれいな場所。UFO の目撃情報も。キャンプ場・宿泊施設も必要)

2. 地域づくりの方向性について

①生活関連の場として活用する方向性について

～現場の地理的条件や地元の資源を活かした新エネルギーシステムの展開～

- 風力発電、太陽光発電
(現場のシンボル、ランドマークとしての意味も込めて)
- バイオマス施設
(家畜ふん尿、製材残材など)
- リサイクル施設
- 生まれたエネルギーの現場他施設などへの活用
(水処理施設、公園、完成記念イベント(例：知事サミット))

○廃棄物処理施設

～水処理施設の活用～

- 農産物、花卉生産への活用
- 蓄積された技術の県境不法投棄現場以外への普及、先進技術の啓発
- 飲料可能になるまで技術を高める

- 保険・医療・福祉の一体化(包括支援)のモデル地区
(特区の活用やNPOによる。周辺環境は心理学的にも活用できる。)

②教育・文化・交流の場として活用する方向性について

(1. 地域づくりに活かしていく自然の方向性に掲載のものを除く)

- 教訓を伝えるオブジェやモニュメント(100~150年の風雪にも耐えるもの)
- 教訓、経験、知恵、技術を伝え、継承するための資料館・記念館
(ゴミの現物、撤去の記録、ゴミ処理体験など。ゴミを排出した県外の人意識にも訴える工夫を)
- 学術機関(大学等)の研究施設誘致
- 広域エリアで設置ニーズが高い県立施設を地元を整備
- ランドスケープを活かした墓地
- 記念日を設ける。
- 野外コンサートや環境をテーマにした演劇開催
- 基金の設置による環境をテーマにした論文募集
- 日本に唯一の場所づくりのためのデザインコンペ(全世界に向けて)
- 周遊性をもたせる工夫
(現場ですべてを完結させなくても、周辺の既存資源(地元農産物でもてなし、地元資源を活かしたさまざまな体験など)と組み合わせ、周遊の一部に組み込むような(田子町を訪れたら必ず現場まで足を運びたいくなるような)仕組みづくり)

③経済活動の場として活用する方向性について

～地場産業(農畜産業)のさらなる飛躍～

- 全国ブランドの「にんにく」「田子牛」の生産
- レンタル・ファームとして活用するとともに、収穫物の即売や合同収穫祭(地元他団体や他市町村)などのイベントも展開する。
- 傾斜地という地形(下から一面を見上げる)を活かして、いろいろな生産物の形態や色彩を活かした扇形の風景画のような景観(=農地アート)を創出する。

～にんにく、にんにく加工品の生産・販売のさらなる飛躍～

- にんにく畑のレンタルファーム化
- にんにく加工場の集約化と加工残渣物リサイクル施設の併設整備(=ゼロ・エミッション)
- 立地条件整備(傾斜地のフラット化)のための帆立貝殻や廃棄物利用による埋め立て
- JAなど地元関係機関や外部の販売戦略プロデューサーなど一体的な推進体制の整備

～企業誘致などの展開～

- 経済特区の活用
- きれいな空気や水を必要とする工場や研究所
- *進出した企業の名誉・評価が高まるように。アクセス道路などインフラ整備も大事。

ファシリテーターによるワークショップ結びのコメント(別紙)

ファシリテーター結びのコメント

○八戸会場

全体的に問題が大きいこともあってか、ブレーストーミング的なワークショップだったかなあという気がしている。

物足りない部分、成果もまとめきれなかった部分あったかと思うが、各グループのファシリテーターが受けた雰囲気、印象、意見を補足しながらまとめていきたい。

全体として、抽象的な話になるが、いろんな分野での活用について、皆さんが思っているのは、日本最大級の廃棄物の不法投棄現場であったということのを忘れないために、どのようにシンボルをつくって、そのシンボルの持つメッセージを伝えていくかということに強い印象を受けた。

具体的に進めて行くに当たって、地元の資源との組み合わせ、つながりをいかにもつかということと、ただ町民だけではなく、町民同士のつながりもそうであるが、流域の関係ある人、納税者とのつながりを取り込んでいこうという意志、考えが共通しているところかと感じている。

シンボル性、メッセージ性、つながりが貫かれるような再生のアイデアが実現することを願っている。

○青森会場

前回の八戸と比べると、距離的なものもあるのか、いろいろと違う意見が出されたという印象を受けている。それでも共通するものがいくつかあるが、本日、現場のイメージとか、現場に対する発想の転換が全体に流れているということ強く感じた。

八戸ではつながりということが出たが、空間的つながりという側面が強かった。今回は時間的なつながり、世代を超えたつながりを取り入れようとしていることを感じた。

田子町の現場は、そこにしかないという意味でかけがえのなさみたいなもの、正であるにせよ、負であるにせよ、宝であるということが意見の中から強く感じて、そういうかけがえのなさを大事にしようということ。つながりでいうと、「田子町だけではないよ、孤立させないよ、僕たちも関わっていくよ」という意欲に満ちたメッセージが込められていたように思う。

これは県に対するお願いというか、中立的な感覚からすると、これは24年度の全量撤去後にどう利用をしていこうかという話で、非常に参加している人にとってはリアリティに欠けるところがあったと思う。勿論リアリティに欠けているのが悪いということではなくて、及び腰というか、ちょっとどうしようかなという感じがあった印象も受けている。スケジュール的にはきついかもしれないが、やはり全量撤去後の現場に立って、イメージ図がずっと出ていたが、そういうところに立って、初めて聞こえてくる現場の声というものもあるのではないかと。風の声とか虫の声とかそういうものを含めた土地の声というものもあるのではないかと印象を持った。勿論それは、そこに行かなければわからないという閉鎖的なリアリズムではないが、全部なくなって初めてわかる、出てくるイメージもあるのではないかと、ちょっと感じている。だからと言って、その時になって初めて考えてみてもしようがないということではあるので、そういう意味では、今回のワークショップが撤去後の利用に向けた小さいけれども確かな一歩にはなっていってほしいと強く感じている。

青森には青森の、八戸には八戸の田子町に対する距離感とか感覚が意見の端々に出ている、逆にそういう多様性が今後の活用策を考える時の大きなヒントになればいいと感じている。